



## エヌ・イー・ピー5600K高輝度LEDライト XD-L168B

スタジオビーンプロダクション 今尾 智介

江戸時代、裏長屋の照明といえば、蠟燭(ろうそく)の約1/5程度の照度しかなかった行灯(あんどん)である。試してみれば一目瞭然、蠟燭の明かりでさえ読書は不可能であり、いかに時代劇がエセ演出であるかがよくわかる。

LEDライトの歴史も、江戸から今日への照明の進化と似ている。従来のLEDライトは行灯のようなものであったと筆者はいい切れる。一般的な居室内で点灯しても地明かりに負けてしまうほど暗かった。しかし、技術革新は目覚ましく、現在発売されているLEDライトのほとんどはタングステンバッテリーライトに追いつく勢いの照度を保持している。

今回試用する製品は、エヌ・イー・ピー「XD-L168B」という、色温度5600Kの高輝度LEDライトである。特筆すべき特徴は、アンバー系フィルター付きであり、乾電池を電源とすることが可能であるという点だ。

### 付属の良質ディフューザーで拡散光が得られる

XD-L168Bの筐体は、灯体部とバンドア部に分けることができ、灯体部からは約250mmの電源ケーブルが伸びている。なお、今回試用したのは、ケーブル長が約250mmのXD-L168Bだが、ケーブル長が約650mmのXD-L518Bもラインナップされている。

XD-L168Bをカメラ上に取り付ける方法は、カメラ



写真2 標準での電源コネクタはカメラ本体から直接受電可能なパワータップ2ピン(オス)



写真1 エヌ・イー・ピーXD-L168B。カメラライトまたはハンディライトとして運用可能

シューまたはスライドの2通りで、いずれも標準で付属されている(写真1)。また、マルチグリップMG-3を(別売)を灯体に取り付けばハンディライトとしても使用可能だ。MG-3は三脚付きなので、灯体を床に置いての運用も可能である。

標準での電源コネクタはカメラ本体から直接受電可能なパワータップ2ピン(オス)となっている(写真2)。消費電力は12Wであることから可能な限りカメラバッテリーから受電したくない。“乾電池を電源にできる”というXD-L168Bのひとつの特徴は、その悩みに応えてくれたものと考えられる(写真3)。乾電池を電源とする場合、専用電池ボックスに単3乾電池8本を入れ、パワータップ2ピン(メス)で灯体側2ピンに接続すればよい。アルカリ乾電池では、照度最大時で約30分の実用連続運用を確認できた。パワータップ2ピン、乾電池のほか、XLR4ピンにも対応可能だ。

光源には3Wの高輝度LEDを4つ搭載して550lx/1mを誇る明るさを実現しており、ON~無段階調光が可能な光量調節ディマー付きである(写真4、5)。

灯体前面には、バンドア、アンバーフィルター(色温度5600Kを3200Kに変換)、ディフューザーが一体と



写真3 単3乾電池8本での点灯も可能



写真4 3Wの高輝度LEDを4つ搭載



写真5 光量調節ディマー



写真6 付属のディフューザーは、光量を損なわずに拡散光をつくれる

なって収まるようになっている。LEDは、もともと前方にしか光が進まないため、拡散を目的とするディフューザーが現場ではたいへん役に立つ。XD-L168B付属のディフューザーは光量を損なうことなく拡散光をつくる優れたものだ(写真6)。

さて、今回はソニーHVR-S270Jに取り付けて試用したが、HVR-S270Jには、パワータップ端子への電源供給をオート/マニュアルと切り替えられる機能が備わっている。電源供給モードをオートにした場合は、カメラのRECボタンと連動してXD-L168Bも点灯する仕組みだ。現実的に現場ではこの機能がはたして必要かといえば、たとえばホワイトバランスを取る際は、ライトを点灯させるためにVTRを回さなければならないのかなど、一概にはいえない。ただ実用的うんぬんは別として、技術革新であることには間違いなく、今後の発展に期待したいところである。

行灯のようなLEDライトから高輝度LEDライトまでいろいろと試用した筆者ではあるが、最近の高輝度LEDライトの出現により発熱量、電力消費などで比べるとタングステンライトに終末の気配さえ感じる。実

用上問題のない明るさを確保できているLEDライトに、いまより一層期待する点は、照射角度の広さである。ただ、XD-L168Bでは、付属ディフューザーによって、LEDランプの宿命である固定照射角の問題を解決した。また、前述のとおり、このディフューザーは光量をほとんど落とすことなく拡散させる優秀なガラスを素材にしている。

本製品のようなライトをカメラトップに載せて撮影する現場は、報道系やワイドショー系そしてドキュメント系である。特に都会における報道やワイドショーの取材は1社だけの撮影は稀であり、各社と共にカメラを回すことが多い。この場合、問題となるのはライトの色温度だ。自分だけ生のLEDライトを点ければ他社に迷惑をおよぼす可能性が大である。XD-L168Bのようにアンバーが付いていればよいが、ない場合には光量を落としてもフィルターを付けることになる。いまだタングステンを備えたハンディライトが主流の現場に問題なくマッチできるLEDライト。その開発がおおいに期待される。

価格：¥5万2500(税込) 問い合わせ先：エヌ・イー・ピー 03(3263)6741 URL：<http://www.nepinc.co.jp/>